

杜甫「屏跡」詩について

森野繁夫

杜甫は四八歳（乾元二年、七五九）の秋に官を棄て、家族を連れて西に旅を續けて秦州、更に同谷縣に七月から十二月初めまでの約半年ばかり逗留するが、厳しい自然條件と食糧事情のため、劍閣を越えて蜀に向かう。苦難の旅の後、十二月の末にようやく成都に辿り着き、友人たちの援助によつて初めて家族そろつての落ちついた生活を送ることができるようになる。そのような生活のなかで杜甫が感じていたのは自然の恵みと優しさであつた。秦州、それに續いての同谷における厳しく陰鬱な自然とは異なつて、生き物を優しく育む蜀の穏やかな自然は、杜甫の考え方を更に廣く深いものに變えたようだ。すなわちそれまで人間の世の中心にして展開されてきた杜甫の思想は、この世界、宇宙を成り立たせ存在させている「自然の理」を中心とするものになつたように思われる。具體的には人間と政治の關わりだけを問題にするのではなく、全ての生き物と此の世界、すなわち自然との關わりを考えるようになってきている。

ここで取り上げる「屏跡」三首は、蜀に落ちついてから三年目の寶應元年（七六二）杜甫五二歳の時の作とされているが、「其の二」には杜甫がそのころ考えていたことがよく示されているように思う。この度は「屏跡」（其の二）を通して此の時期における杜甫の思想を見ていく。

用拙存吾道

拙を用て 吾が道を存す

幽居近物情

幽居 物情に近づく

桑麻深雨露

桑麻 雨露深く

燕雀半生成

燕雀 半ば生成す

村鼓時時急

村鼓 時時 急にして

漁舟箇箇輕

漁舟 箇箇 輕し

杖藜從白首

杖を杖つきて 白首に従ふも

心跡喜雙清

心と跡と 雙つながら清きを喜ぶ

「拙なる生き方によつて吾が道を存することができ、幽居することによって物情に近づくことができる。桑や麻に 雨露の恵みは深く、燕や雀は半ばはもう巢立つていった。村々から聞こえてくる太鼓の音は 時折り急しくなり、漁舟はそれぞれに 軽やかな動きを見せている。藜の杖をつきながら 頭が白くなるのにまかせて、心と行いと ともに清らかであるのを喜んでいゝ。」—この時期、杜甫はどのようなことを考えていたのか、語句を追いながら順に見ていくことにする。

一、「用拙存吾道」—拙を用て 吾が道を存す—

この句の意味は、「拙なる生き方を續けることによつて、吾が道を保つ

てゆくことができる」ということであるが、「拙」によつて、どうして「吾道」を存することができるのか。その答えを出すためには杜甫の言う「拙」と「吾道」の意味する内容を確かめなければならない。

1 杜甫における「拙」

「拙」とは、「巧」すなわち世渡り上手、企み、の反對語で、拙い生き方、世渡り下手なことをいう。例えば晉・宋の際の陶淵明「雜詩」十二首の八（全14句。11〜14）には、

人皆盡獲宜 人は皆盡く宜しきを獲るに
拙生失其方 生に拙にして其の方を失す
理也可奈何 理や奈何にす可き
且爲陶一觴 且は爲に一觴を陶しまん

「まわりの人は皆上手にやっているのに、私は世渡りが下手で其の方法がわからない。定めというものかどうしようもない、先ずは一杯の酒を陶しむとするか。」のようにある。

杜甫の詩には此の「拙」が隨所に使われており、その意味は陶淵明の詩における「拙」と同じく、世渡りが「拙い、下手」というものである。例を挙げると、

- ・「自京赴奉先縣詠懷五百字」（全100句。1〜4）天寶二四載（七五五）
杜甫四四歳
- 杜陵有布衣 杜陵に布衣有り
- 老大意轉拙 老大にして意は轉た拙なり
- 許身一何愚 身に許すことの一に何ぞ愚かなる

竊比稷與契 竊かに稷と契とに比す

「杜陵の民である私は歳をとるにつれて其の意はいよいよ世間向きでなくなつていく。愚かにも内心では自分を舜の賢臣の稷や契に比えていたのに。」

- ・「北征」（全40句。41〜44）至德二載（七五七）四六歳
- 雨露之所濡 雨露の濡す所
- 甘苦齊結實 甘と苦と齊しく實を結ぶ
- 緬思桃源内 緬かに桃源の内を思ひ
- 益歎身世拙 益す身世の拙なるを歎く

「雨露に濡されて、木の實は甘いもの苦いものとそれぞれにりつばな實をつけている。あたかも桃源の仙郷にいるような氣がするが、それについても自分の處世の拙さが歎かれる。」

しかし「拙」に込められた意味は、陶淵明、杜甫の兩者において、或る時期を境にしてプラスの要素が加わってくる。すなわち淵明の場合には、「拙」のために官吏社會をうまく渡つてゆけない嘆きから抜け出て、自然の中では「拙」なる生き方こそ、有るべき姿なのだと覺つて園田に歸つていった。

- ・「歸園田居」其の一（全20句。5〜8）
- 羈鳥戀舊林 羈の鳥は舊き林を戀ひ
- 池魚思故淵 池の魚は故の淵を思ふ
- 開荒南野際 荒を南野の際に開かんと
- 守拙歸園田 拙を守りて園田に歸る

「旅の鳥は舊いた林を戀しく思い、池の魚は故の淵を懐かしく思うもの。そのように私は南の野に荒地を開こうとして、世渡り下手を守り通して田園に歸つてきた。」とあるのがそれである。

杜甫の場合は、官吏社會をうまく渡つてゆけない嘆きから、人間も含めて自然の中の生き物は全て、自分に與えられた性と命のままに「拙」なる生き方をすればよい。それが自然の道理なのだとする考え方に變わっている。

・「暮春題漢西新賃草屋」五首 其の二（全八句。1〜4）大曆二年（七六七）五六歳。夔州での作。

此邦千樹橘 此の邦 千樹の橘

不見比封君 封君に比せらるるを見ず

養拙干戈際 拙を養ふ 干戈の際

全生麋鹿群 生を全うす 麋鹿の群

「この土地では千本の橘を持っていなくても、封君に比することはできない。私は拙さを養いながら此の戦亂の際にも、麋鹿の群のように世俗を離れて生を全うしている。」——ここでは自分の世渡りの「拙さ」を嘆くのではなく、逆に「拙を養う」拙なる生き方を大切に養つていこうとしている。更に「屏跡」詩になると、「拙」であることは「吾道」を保つてゆくためにどうしても必要なことであると言ふようになっていく。

ただ兩者の相違点は、陶淵明の方はどこまでも自分ひとりの生き方の問題についての考えであるのに對して、杜甫の方は、自分だけの問題ではなく、常に世の人々のことが背景としてあった。すなわち、「拙」なる生き方を通して「自然の道理」というものを確認し、それを詩に表現して人々に知らせたい。そうしてやがては「自然の理」に順應した穏やか

杜甫「屏跡」詩について

な世になつてほしいと願つていた。

さて、杜甫の詩における「拙」の意味がこのようなものであるとすると、その後の「吾が道を存す」という語句とはどのように關わつてゆくのであろうか。次に「吾道」の内容を調べなければならない。

2 杜甫における「吾道」

杜甫の詩では「吾道」の語は、安祿山の亂を境として見られるようになり、全部で十三例が使われている。例を擧げてみると、

・「秦州雜詩」二十首の四（全8句。5〜8）乾元元年（七五八）杜甫

四七歳

抱葉寒蟬靜 葉を抱きて 寒蟬は靜まり

歸山獨鳥遲 山に歸る 獨鳥は遲し

萬方聲一概 萬方 聲一概

吾道竟何之 吾が道 竟に何くにか之かん

「じつと葉にへばりついていっている寒の蟬、山に歸つていく獨りものの鳥。天下いづくに行くとも戦の太鼓の音ばかり、吾が道、すなわち自分に與えられた、世の人すべてに『生理』を全うせしめんとする使命は、いつたいていどうなっているのであろうか。」——ここでは「吾道」には、漂泊の旅の行く末と、自分に與えられた使命が重ねられている。

時に杜甫は生活の苦しさ故に華州司功參軍の官を棄て、家族を連れて秦州（今の甘肅省の東端にある天水縣）に留まっていた。しかしそこは國境の町で氣候風俗は異様であり、頼りとしていた人も頼りにならなかった。杜甫は二箇月あまり滞在した後、やや南にある同谷縣に移つてゆくが、そこでも生活が成り立たず、やがて劍閣を越えて蜀に向かう。

三九一

・「奉漢中王手札、報韋侍御蕭尊師亡」(全12句。5く12)大曆元二年(七六七)杜甫五六歲

不但時人惜 但だに時人の惜しむのみならず

祗應吾道窮 祗だ應に吾が道の窮するなるべし

一哀侵疾病 一哀 疾病に侵さる

相識自兒童 相識 兒童よりす

處處隣家笛 處處 隣家の笛

飄飄客子蓬 飄飄 客子の蓬

強吟懷舊賦 強ひて吟ず 懷舊の賦

已作白頭翁 已に白頭の翁と作れり

夔州に滞在していた杜甫が、漢中王からの手紙で舊知の韋侍御と蕭尊師が亡くなったことを知った時の作。「二人の死は時人に惜しまれるだけでなく、『吾道』もこのことで窮することになるのであろう。私は病氣に侵されながら、子供の頃からの知り合いである二人に哀哭の禮を盡くす。今の自分は風に漂う蓬のような身の上、隣家の笛の音を聞きながら哀しみに耐えられない」と、友を悼み、且つ自らを傷んでいる。「吾道窮」は、西狩獲麟の際に孔子が発した言葉で、『春秋公羊傳』(哀公十四年)に「西狩獲麟。孔子曰、吾道窮矣」とある。杜甫は自分の行わんとする道の理解者、支援者であった韋侍御と蕭尊師の死にあたり「吾道窮せり」と歎じている。

この「吾道」という語は、『論語』里仁篇にも孔子の言葉として記されている。

子曰く、參よ、吾が道は一以て之を貫くと。曾子曰く、唯と。子出づ。門人問ひて曰く、何の謂ぞやと。曾子曰く、夫子の道は、忠恕

のみと。

子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。

孔子は弟子たちに「私の道は、一つのもので貫かれている。それは忠恕(真心、思いやる心)である」と教えている。杜甫は「吾が道は一以て之を貫く」という孔子の言葉を意識しながら、此の「吾道」の語を使っていたと考えられるが、それでは杜甫の「吾道」を貫く「一」なるものは何であったのか。それは「生理」すなわち「人としての自然な生き方」を全うすることであり、更に杜甫の場合は自分に與えられた、世の人々全てが「生理」を遂げることができるような世の中にするという使命を果たすことであつた。

従つて「用拙存吾道」とは、「拙なる生き方によつて、私に與えられた『生理』の道を保つてゆくことができる」という意味になろう。次に、「用拙存吾道」の對の句である「幽居近物情」について見ていく。

二、「幽居近物情」——幽居 物情に近づく——

「幽居」とは、世俗の情を離れた「拙」なる暮らしのことであり、それはまた後の句における「心跡喜雙清」(心と跡と 雙つながら清きを喜ぶ)すなわち、心と跡^{おと}がともに「清」らかでおれる、そのような暮らしぶりであることをいう。「物情」とは、生き物に備わっている性情、ということであろうが、具體的に杜甫の詩の用例(「屏跡」詩を除く四例)を通して意味を考えてみよう。

①義鵬行(全36句。21く28)安祿山の亂後、暫くしての作。

この詩は、鵬という猛鳥が、子鳥を白蛇に食われた蒼鷹のために、そ

の蛇を殺して敵を討つという内容で、杜陵の樵夫から聞いた話だという。

生雖滅眾雛 生きては眾雛を滅ぼすと雖も
死亦垂千年 死しては亦た千年垂る
物情有報復 物情に報復有り
快意貴目前 快意 目前なるを貴ぶ
茲實鷲鳥最 茲れ實に鷲鳥の最たり
急難心炯然 急難に心は炯然たり
功成失所往 功成りて往く所を失ふ
用舍何其賢 用と舍と 何ぞ其れ賢なる

「この蛇は多くの雛を殺したが、千年の後まで惨めな手本を残すことになった。『物情』としては報復ということがあり、この度そのことを知ることができて痛快であつた。」—ここでの「物情」の意味は「生き物の性情」ということのようなのである。したがつてこの句は「生き物の性情として報復ということがあるものだ」という意味になろう。

②夏夜歎(全24句。5〜12) 乾元二年、四八歳。
夏の夜の景物を詠じた作。

昊天出華月 昊天 華月出で
茂林延疏光 茂林 疏光を延く
仲夏苦夜短 仲夏 夜の短きに苦しみ
開軒納微涼 軒を開きて 微涼を納る
虛明見織毫 虛明にして 織毫を見
羽蟲亦飛揚 羽蟲も亦た飛揚す
物情無巨細 物情 巨細と無く

杜甫「屏跡」詩について

自適固其常 自ら適するは 固り其の常なり

「外は月光に照らされて明るく細い毛筋まで見えるほど。羽蟲も飛びまわっており、大小に限らず生き物の性情としては、自分の意に適うように生きるのが自然のきまりである。」—ここも「生き物の性情」という意味。

③寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻(全60句。1〜8) 乾元二年の作。
遠く離れた任地にいる友人、高適と岑參に寄せた作。

故人何寂寞 故人 何ぞ寂寞たる
今我獨淒涼 今我 獨り淒涼たり
老去才雖盡 老い去りて 才盡くと雖も
秋來興甚長 秋來 興甚だ長し
物情尤可見 物情 尤も見る可きも
辭客未能忘 辭客 未だ忘る能はず
海内知名士 海内 知名の士
雲端各異方 雲端 各の方を異にす

「世人の性情の輕薄なことは此の際よくわかるのだが、それだけにあなたがたのことは今も忘れられないでいる。」—ここでの「物情」は、「世人の性情」という意味のようである。

④夔州歌十絕句 其の二(全4句) 大曆元年(七六六)杜甫五五歲頃の作。
長江を下つてゆく途中、暫く滞在していた夔州の風土や民情などについて詠じた作。

白帝夔州各異城 白帝夔州 各おのの城を異にす

蜀江楚峽混殊名 蜀江 楚峽 殊名を混ず

英雄割據非天意 英雄の割據は 天意に非ず

霸王并吞在物情 霸王の并吞するは物情に在り

「英雄が割據するのは天意ではないし、霸王が天下を併合することができるのは民の心に據るものだ。」—徳の有る者にしてはじめて民情を得て天下併合が可能となることをいう。ここでは「物情」は、「民の心」という意味に使われている。

以上のように「物情」の語は、「生き物の性情」という意味と「人間の性情」という意味で使われており、①②と「屏跡」詩の場合は前者、廣く生き物の性情という意味であった。しかしそれは要するに、人を含めて全ての生き物の性情を意味する語と言えよう。

さてそれでは「幽居近物情」とはどういうことなのか。以上の調べによればそれは、「幽居」によって心も行いも清らかな身になると、生き物たちが自然から與えられた性情、つまり『生理』（其の物としての自然な生き方）に近づくことができる、それがわかってくる」という意味になろう。

三、「屏跡」に見られる杜甫の考え

「拙を用て 吾が道を存す、幽居 物情に近づく」の二句の意味は、以上の調べに據れば「拙なる生き方によって、吾が道を保つてゆくことができる。幽居によって心も行いも清らかな身になってくると、身のまわりの生き物の性情に近づくことができるのだ。」という意味になる。

もう少し詳しく述べると「吾が道」とは「生理」（人としての自然な生き方）を遂げることであり、更に杜甫の場合は「生理」を世の人々に及ぼ

すことであつたが、その「吾が道」を推し進めてゆく力は、世俗の欲と企たくらみを拭い去つた「拙」なる暮らしによって養われると杜甫は言う。すなわち「用拙存吾道」（拙を用て吾が道を存す）。更に杜甫は、「拙」なる「幽居」を續けることによって、生まれたままの清らかな心身になると、身のまわりの生き物たちの性情、心、つまりそれぞれが自然から與えられている「生理」に近づいてくる、即ちわかってくるようになるという。すなわち「幽居近物情」（幽居 物情に近づく）。

それは何故かといえば杜甫は、人間も含めて全ての生き物は、「自然の道理」によってそれぞれに生命と性質、形體が與えられており、その形體、性質は異なつていても生命の營みというものは變わらない、と考へていたためであろう。人であろうが鳥獸であろうが、この世界に生きてゐるものは全て「自然の理」によって生命を與えられたのであり、同じく「自然の理」に従つて生きてゐるものであるからには、すべて通じ合うところのある存在なのであつた。

しかし自然から與えられた本性が世俗の欲によつて覆い隠されている人間にとつて、「物情に近づく」ことは無理な話であつた。杜甫は、「幽居」して「拙」を養い、身も心も清らかならなつてはじめて、他の生き物たちの性情、つまり「物情」に近づくことが可能になると考へていた。

「屏跡」の詩には「用拙存吾道、幽居近物情」の後に、

桑麻深雨露 桑麻 雨露 深く

燕雀半生成 燕雀 半ば生成す

の二句が續く。季節も移り「桑や麻は雨露の深い恵みを受けて大きくなつており、燕や雀も順調に育つて已に半分は巢立つていった」と、自然の道理に順つてそれぞれに生育していく様子を詠んだ此の二句は「物情

に近」づいた杜甫の目に映る情景であつた。また其の次には、

村鼓時時急 村鼓時時急にして

漁舟箇箇輕 漁舟箇箇輕し

「村々から聞こえてくる祭りの太鼓の音は、時折り急しくなり、漁舟はそれぞれに輕やかな動きを見せている」と、季節の移り變わりに順つての人々の穩やかな暮らしが詠われている。

「屏跡」の詩から五年の後、大曆二年（七六七）五六歳、夔州での作「秋夜」五首の二（全八句）の前半四句には次のようにある。

易識浮世理 識り易し浮世の理

難教一物違 一物をして違はしめ難し

水深魚極樂 水深くして魚は樂しみを極め

林茂鳥知歸 林茂りて鳥は歸るを知る

「此の世界の道理というものは、べつに難しいものではない。それは『生き物のどれ一つについても、自然によつて與えられた其の物の生き方を變えることは難しい』ということだ。水が深ければ魚は生きる樂しみを極め、林が茂つておれば鳥は安心してそこに歸つてゆくのだ。——ここには「屏跡」の詩において「拙を用て吾が道を存す、幽居物情に近づく」と詠われていた杜甫の「自然の理」追究の成果が詠われている。すなわち、人間を含めて此の世界に生きている物は、「自然の理」によつて與えられた生を全うするように定められており、その生き方、つまり「生理」を變えることは難しいことであると言う。

杜甫「屏跡」詩について

杜甫の詩の偉大さについて吉川幸次郎氏は、「杜甫の詩論と詩」（『吉川幸次郎全集』12）において大要次のようなことを述べておられる。

杜甫の詩には二つの方向がある。一つの方向は、緻密さ、精密さである。このことは、先ず人間の事實なり自然の事實を、微細な部分にまでわたつて見極めようという熟視となり、見極めたものを心の中で咀嚼する熟慮となり、またそれを言語として表現するにあつては、極めて緻密な言語となつている。もう一つの方向は對象の背後にあるものに觸れようとする方向、すなわち超越、飛躍の方向である。論理の世界における眞實、それは輪郭のはつきりした形の眞實であるが、それとは異なつて、同じく眞實ではあるが、輪郭をはつきりさせたものの背後に、輪郭をはつきりさせないものとしてある眞實、あるいは輪郭をはつきりさせないがゆえに眞實であるもの、杜甫はその追跡を詩の任務としていた。

これまで杜甫の詩について見てきたことを吉川氏の説明に當てはめると、「屏跡」の詩の「用拙存吾道、幽居近物情」の句に詠われているような、「拙」なる「幽居」を續けて「物情」に近づかんとすることが、「緻密」「精密」の方向であり、「秋野」の詩の「易識浮世理、難教一物違」たとえ一物であっても自然の理によつて與えられた其のものの「生理」を變えさせることは難しい、という指摘が、「超越」「飛躍」の方向なのである。

人間の事實なり自然の事實を、熟視し、熟慮し、それにもとづいて見極めた眞實を緻密に表現し、更に見極めた眞實の背後に存在するはずの「自然の理」を追究せんとするのが、杜甫の文學活動であつたと言える。

注

① 杜甫の詩における「生理」という語は、従来「生活」「暮らし」という意味に解されてきたが、そうではなく「人としての自然な生き方」、杜甫の場合は特に、それを世の人々全てに及ぼすという、自分に與えられた

使命という意味で使われているように思う。詳しくは、市原里美「杜甫の詩に見える『生理』」（『中國中世文學研究』四九號）参照。

（安田女子大學教授）